様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年 １０ 月 １４ 日現在

機関番号：２３６０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2011～2015
課題番号：２３７９２５４３

研究課題名（和文）倫理問題への対処行動からみた看護学生のケアリング倫理観に関する研究

研究課題名（英文）A study concerning nursing students' sense of ethics which govern their behavior during clinical training

研究代表者
田中　真木（Tanaka, Maki）

長野県看護大学・看護学部・助教

研究者番号：００４０５１２７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,600,000円

研究成果の概要（和文）：実習で経験した倫理問題への対処行動から、看護学生の持つ実習へ向き合う姿勢を明らかにし、今後の臨地実習における看護学生への関わりへの一示唆とすることを目的として研究を行った。研究協力に承諾の得られた看護学生11名に半構成的インタビューを行い、質的手法で分析を行った。結果、22の倫理問題とその対処行動が明らかとなった。そこから、臨床の看護師との関係性に重きを置いた価値判断を持つ特徴が明らかとなった。看護学生へ関わる者として、このような価値観を持つことを理解し、患者へより良いケアを提供する道筋を考えさせる関わりや、実習指導体制さらには臨地実習の在り方そのものも検討される必要性があることが示唆された。

研究成果の概要（英文）：To understand this better I conducted a study by focusing on what sense of ethics students display and how it may be expected to be influenced by the clinical training. Sample is 11 Nursing students who have the experience of participating in a clinical setting. I identified 22 ethical problems and 10 coping behaviors in the narratives of the students. They are mostly about interactions between nurses and patients, and about the behaviors or attitude of nurses towards patients. They lean towards valuing the relationship with nurses who cause a particular problem rather than concern themselves about the patients involved in the problem. It is necessary to provide an education that enables students to discuss with teachers and nurses, and to think back on their attitudes in an effective and productive manner, rather than an education that forces students to reorient the sense of ethics and adapt their decisions and attitudes about ethical problems they encounter in the clinical training.

研究分野：基礎看護

キーワード：看護学生　倫理観　臨地実習　対処行動　倫理問題

１．研究開始当初の背景

現代社会では人々の価値観は複雑、多様化しており、さらに患者の権利意識が高まる中、医療専門職には高い倫理観が求められる。今後、看護基礎教育においても倫理的判断能力をどう育成するか、倫理的視点を育む教育の必要性がますます高くなると言える。

中でも臨地実習は、学習した知識・技術の応用だけでなく、患者へのケアを通して、また看護職者の行動から看護観を育成し、現場での倫理問題への対処方法を学習させる場でもあり、看護における倫理教育の絶好の機会となり得る（水野ら、1997）とされ、1 年次から卒業年次までの継続的な学習の積み重ねや体系的な倫理教育の必要性が求められる（志自岐、2000）。しかし、現在のところ日本の看護教育において倫理教育は体系化されておらず、教員の裁量に任されているのが現状である（秋元、1998）。

現代における看護は、「看護師として何をなすべきか？」と、「今の医療にふさわしい、よい看護師とは？」という倫理上の問いがきわめて重要であり、この 2 つを区別して探求する事は、看護倫理の理論的発展のために必要不可欠な視点といわれている（小西、2005）。このうち、「何をなすべきか？」という問いは、倫理問題への対処行動をとる際の自分自身への問いかけである。つまり、臨床で遭遇した倫理問題に対する看護学生の対処行動は、その学生の持つ倫理観を映し出す鏡とも言うことができる。

看護学生が捉える倫理問題の内容については既に研究がなされているが（佐藤、2005）、倫理問題に対する対処行動の基盤となる看護学生の倫理観に着目した研究は国内外の文献をみても皆無である。看護学生が実習で遭遇する倫理問題への対処行動から、彼らの倫理観を特定し、類型化することができれば、看護倫理教育の課題および倫理的視点を育むためにどうしたらいいのかという具体的な方法論の構築のための資料となり得ることが期待できる。

２．研究の目的

本研究は、看護学生が臨地実習で遭遇する倫理問題への対処行動のもととなる倫理観を明らかにすることを目的とし、今後の看護倫理教育のあり方を探求するための基礎資料とする。

３．研究の方法

（１）研究デザイン

臨地実習の経験がある看護学生に半構成的インタビューを行い、質的手法で看護学生の持つ倫理観の仮説的特質を抽出する質的帰納的研究である。

（２）研究対象者と募集方法

看護系大学に在籍する基礎看護・専門（領域別）実習を経験した学部 4 年生で、研究への同意が得られた学生。募集は、対象の大学内に研究趣旨と倫理的配慮、研究者の連絡先について明記したポスターを掲示した。研究参加希望者は自由意志で研究者へ直接連絡を取り、希望する旨を申し出てもらった。さらに、snow-ball sampling も併用し、対象者を募った。研究協力が得られたら、対象者の都合の良いインタビュー日程、場所を調整した。

（３）データ収集方法

①期間

平成 23 年 9 月～平成 23 年 10 月

②インタビュー内容

今までの実習経験を思い出してもらい、「何を行うことが正しいのか間違っているのか、人の行いにおいて何がよいことで、何が悪いことなのか、と考えさせられる問題（倫理問題）」について独自のインタビューガイドを作成し、その時の詳しい状況、自分自身はその場面をどう捉え、どのような行動をとったのか、それはなぜかを半構成的面接法を用い、語ってもらった。面接内容は対象者の許可を得て、IC レコーダーに録音し、逐語録を作成した。逐語録化したものは、member checking を実施し、対象者自身が語った内容について確認してもらった。

（４）倫理的配慮

データ収集に先立ち、研究者所属機関の倫理委員会で承認を受けた（承認番号：2011-4）。研究者は看護大学教員であり、対象者は看護学生であり、インフォームドコンセント（IC）における研究者からの力による強要(Coercion)といった問題を回避するため、インタビュー参加に際し、研究の目的・意義・方法・予測されるリスクと利益、成績には影響しない事、自由参加であること、参加を拒否してもその後の学生生活において不利益がないこと等を参加者に説明した。さらに、研究参加についての掲示用ポスターにも、上記 IC を分かりやすく明記した。応募者にはインタビュー参加に際し、研究の目的・意義・方法・予測されるリスク（対象者自身の遭遇した倫理問題によって不快な感情を思い出すなどの心理的負担を抱く恐れがあるなど）と利益、成績には影響しないこと、自由参加であること、参加を拒否してもその後の学生生活において不利益がないこと等を改めて説明した。

（５）分析の手順

対象者の語る具体的なエピソードを逐語録から抜き出し、学生が遭遇した倫理問題への具体的な行動とその背景を分析し、そこから現れる倫理観の仮説的特質を抽出した。その具体的手順は以下の通りである。

具体的な対処行動とその背景を分析するに当たり、対象者の語ったエピソードを新行動

主義心理学における内的心理モデル「S(Stimulus:(刺激)-O(Organism:有機体の内的要因)-R(Response:反応)理論」に基づいて分類した。倫理観は常に意識するものではなく、意識の根底を成すものであり、人はその行為基準（倫理観）を持って、どう行動すべきかを決定してゆく（デービス、1999)。言い換えると、倫理的問題への対処行動には、その人の持つ倫理観が表れる。行動心理学から発展した、直接観察されない精神的内部構造を視点に持つ新行動主義心理学では、その内面的な心理モデル「S-O-R 理論」を用いている（辰野、1995)。本研究では、看護学生の倫理観を明らかにすることを目的とするため、倫理問題への看護学生の対処行動(Response)を対象者の語る具体的エピソードから汲み取る事で、その看護学生の持つ内的要因(Organism)を明らかにできると考え、それを分析の際のツールとして用いることとした。
エピソードから汲み取った対処行動とその内的要因についてはコード化し、意味の類似するものを集め、サブカテゴリー、カテゴリーを抽出した。

（6）分析の信頼性と妥当性
研究の全過程において、国外の看護研究者にスーパーバイズを受けた。そのスーパーバイザーに指導を受けながらエピソードを通読し、倫理問題とその対処行動、内的要因の汲み取り方は妥当か、コード、サブカテゴリー、カテゴリー名は語りを反映したものかを検討した。

4．研究成果

（1）対象者の属性
対象者は、男性 1 名、女性 10 名の計 11 名であった。すべて、看護系大学学部 4 年生に在籍し、基礎看護実習と専門（領域別）実習を経験していた。面接時間は 20 分から 60 分であった。

（2）看護学生が遭遇した倫理問題
臨地実習において遭遇した問題について、対象者は、看護師が患者と関わる場面をあげ、その中での看護師の行動や態度・発言に対し、「おかしいと思う」、「ちょっと気になった」、「こうした方が良いのではないか」という思いを語った。倫理問題だと語った場面は 22 場面あり、看護師や医師、理学療法士などの姿勢や行動に関するものであった。具体的には、患者の個別性を考慮しない関わりや、患者の個人情報を大きな声で話す、患者への声の掛け方がきついといった語りがあった。

（3）倫理問題への対処行動と内的要因
①倫理問題に遭遇した際の看護学生の思い
分析手法に従い、隣地実習で遭遇した 22 の倫理問題場面から感じた学生の思いを抽出した。その結果、14 のサブカテゴリーと 8 のカテゴリーに大別できた。

表 1　倫理問題に遭遇した際の学生の思い

カテゴリー	サブカテゴリー
医療者への思い	医療者への恐怖
	医療者への批判
学生としての立場	学生としての立場を確認する
看護への思い	看護への嫌悪感を抱く
患者への思い	患者に申し訳なく思う
	患者は弱いと思う
行動への思慮	自身のとった行動を反省する
	問題の善行を考える
	対処行動への意欲
	取るべき行動の思慮
	今後の行動への啓発
場面への思い	切ない、辛いといった場面への率直な感情
倫理観の再構築	医療者の行動を理解する
	倫理問題への理解

＜医療者への思い＞は≪医療者への恐怖≫、≪医療者への批判≫で構成され、倫理問題を引き起こす原因となる医療者の行動に対して感じた感情が語られた。

―「もうちょっと詳しく、こういう方向性があるよみたいなのを、説明したりとかすればいいのになあと思って聞いてて」
―「80 代のおじいちゃんだったんですけど、「何何さん、ちょっと待ってて！」みたいな言い方の患者さんとか、なんか、もっと違う言い方があるんじゃないかなっていうか…。見てて、でも何も言えないし何もできないんで、見て、聞いてるだけでしたね。なんか、「嫌だな」と思って終わりました。」
―「あの陰部洗浄初めて私、見させて貰う時に、看護師さんに付いて行って、「じゃちょっと、こうやってするよ。」って、練習、違う、この実習の練習では、やっぱりあのプライバシーに配慮してタオルを掛けたり、カーテン閉めたり、ってことを徹底して練習してたんですけど、病院では、そんなに簡単にお尻を開けちゃったり（中略）看護師さんて冷たいなって思ってしまったんですけど」

＜学生としての立場＞では、「自分は（倫理問題の原因となる）医療者へ意見できる立場ではない」、「学生の身では言えない」、「(倫理問題であると）自分が言うのはでしゃばっていると思う」、「自分は実習させてもらっている身である」、「これが正しいと言うのはお門違いだと思う」等と対象者は語った。多くの対象者が、臨地実習での学生の立場について表現していた。
＜看護への思い＞では、倫理問題に関わる医療者に対し、「こんな職業は嫌だ」や「そんな看護師は嫌だと思う」と語った。
＜患者への思い＞では、≪患者に申し訳なく思う≫、≪患者は弱いと思う≫というサブカテゴリーで構成された。

―「普通に車いすに乗ってらっしゃる他の利用者さんが普通のトイレ利用しているのに、自分がベッドの近くのポータブルトイレを毎日使わなきゃいけないっていうのを、それもどうなのかなっていうふうに思うところもあったりして。ちょっと申し訳ない感じで。申し訳ない気持ちになっちゃいました。」
―「人として大切にしないといけないなと思うし、患者さんてやっぱ弱いかなと思っちゃうけど、人としては同等の立場だから。友達にもし「何何ちゃん」と呼ばれてたとしたら顔とかは向けると思うし、体も向けてちゃんと聞くと思うし。「ちょっと待ってて！」という言い方じゃなくて「ごめん待っててね」とか言えると思うのに、やっぱ患者さんだから待っててもらってて当然とか、してあげて当然とかいう風になっちゃうと、ああいう態度になっちゃうのかな。」

＜行動への思慮＞は、倫理問題に至るまでの自身の行動を振り返り、≪自身のとった行動を反省する≫や、この場面はよいことなのかよくないことなのかといった≪問題の善行を考える≫、倫理問題への対処行動を積極的に図ろうとする≪対処行動への意欲≫と、どのように対処行動に取り組むべきかという≪取るべき行動の思慮≫、さらに「今後同じような場面に当たった時には気を付けよう」とする≪今後の行動への啓発≫で構成された。
また、倫理問題へ遭遇した際に「切ない」、「辛い」、「驚き」、「ショックだ」、「何とも言えない気持ちになる」という＜場面への思い＞も多く対象者から語られている。
多くの学生が倫理問題やその原因となる医療者、その対象である患者に対し様々な思いを語る中で、≪医療者のとった行動への支持≫、≪これが現実だと思う≫といった倫理問題やそれに関係する医療者へ理解を示すカテゴリー＜倫理問題への理解＞が抽出された。

―「一応患者さんはその時間を知ってるから、それに合わせて生活っていうか、行動してるので、遅れるなら言ったほうがいいんじゃないかな、って思います。（中略）これが病院のやり方だから、実習させてもらってる身だから、何かそこに合わせた方がいいのかな？っていう気持ちがあるのかなって思います。」
―「（陰部洗浄の際）たぶん臨床でシャーッとカーテン引いて、「はい、やるよー」みたいな感じで。スピードが命！みたいな感じで。（中略）仕事だから仕事と、人情じゃないですけど、そういうのは切り離さないと仕事やっていけないのかな、って思ったんですけど。」
―「（食事介助の際）口元にスプーン持ってって、口に当てれば口開けるから、それで食べさせてじゃないけど、そういうのがあって、本人は、もう要らないって言ってるけど、それを無理やりみたいな。その介助の仕方が、いいのかな？って思いつつやってた所があって。この無理やり感がいいのかな？っていうのがずっと、引っかかっていて。」

②倫理問題への対処行動
分析手法に従い 22 場面から、看護学生の対処行動を抽出した結果、10 の対処行動が明らかとなった。それらは、時系列で分類した場合、「倫理問題へ遭遇時」と「倫理問題へ遭遇後」の 2 つに大別できた。

表 2　看護学生の倫理問題への対処行動

	対処行動
倫理問題遭遇時	現場の方法に従う
	特に行動はとらない
	見ているだけ
倫理問題遭遇後	看護師・指導者へ相談する
	隣地実習指導教員へ相談する
	実習グループメンバーに話す
	グループ課題で取り上げて発表する
	実習カンファレンスで話す

隣地実習で倫理問題に遭遇した際、看護学生は倫理問題だと認識しつつも「特に行動は取らない」と語る対象者が多かった。その患者の生活行動を考慮せず全身清拭を実施した看護師の一連の行動を「傍らでただ見ているだけだった」や食欲が無い患者へ無理やり食事介助を実施している場面では、対象者は「いいのかな」と善行を思慮しながらも「現場の方法に従う」といった行動が語られた。
また、倫理問題遭遇後の行動では、看護師または臨地実習場の指導者や、隣地実習指導教員に、医療者としての行動の是非やその際の自身の取るべき行動等について相談する、遭遇した事象について実習グループメンバーに話す、グループ課題として取り上げ、実習終了時の成果発表会で発表する、実習カンファレンスで自身が遭遇した倫理問題について話す、といった対処行動が明らかとなった。

（4）結果から明らかになったこと
看護学生は臨地実習で起こる現象を、自身の内なる基準の中に受け止め、周囲の反応から影響を受けながらその現象への意味づけを導き出していた。倫理問題に遭遇した看護学生は、医療者が示す患者への姿勢や態度・行動について、多くの対象者が様々な感情を抱きながらも「よいのだろうか」とその行動の是非について思慮している。そこで対処行動を方向付ける看護学生の倫理観を考えたとき、「現場の方法に従う」、「特に行動は取らない」、「見ているだけ」という対処行動は、その根底に「学生としての立場」があり、倫

理問題に関係する患者と医療者との関係性を考慮し、対処行動を判断づけていることが伺える。「学生としての立場」とは、「学生は口出しすべきではない」、「実習させてもらっている身である」、「学生の身では（倫理問題について意見を）言えない」等が対象者より語られている。倫理問題に遭遇した看護学生が医療者との関係性を重視した場合、倫理問題は存在し続け、その対象である患者や施設利用者へ矛先が向く。たとえ、「自分の時には気を付けよう」と看護学生が思ったとしても、目の前の倫理問題へのアプローチは行われない。さらに、「これが現実だと思う」、「病院のやり方はこうなのだと思う」、「現場のやり方に合わせたほうが良い」との語りは、「おかしい」と場面を考察しながらも、その見解の方向性を変え、その場に合った対処行動を導き出すよう自らの倫理観を再構築していることが伺える。この倫理観の再構築は、臨地実習の目指すもの、いわば専門職としての倫理観の育成に見合った過程とするならば、そこに臨地実習指導教員もしくは臨床指導者の介入も必要であることが考えられる。行動を規定する新しい基準を学ぶ場合、その場面の状況、判断の是非、行動の基準、その結果などの一連の評価を丁寧に第3者と共に確認することは臨地実習における学びの過程として重要である。結果の中では、看護学生が倫理問題の直接的な原因である看護師やスタッフに意見することは無かった。価値観というものが、前述したとおり、何が大事で何が大事でないかという判断、ものごとの優先順位づけ、ものごとの重み付けの体系のことであるならば、この学生たちの価値観こそ、問題にかかわる患者よりも、その問題の原因となる看護師との関係性に重きを置いていることがうかがえる。それは、「実習だから割り切る」、「受け持ち患者であれば行動する」、「学ばせてもらっている」という発言が表している。それらのことが、学生たちにとって良いことか否かは今後さらなる調査から明らかにしてゆくことが求められる。

（5）参考文献

- 水野智子,今川詢子他（1997）：看護ジレンマと看護倫理教育に関する研究第2報,埼玉県立衛生短大紀要,22,55-63
- 志自岐康子(2000)：基礎看護教育における看護倫理の教育-基礎看護学の立場から-,看護教育,41（4）,269-270
- 秋元典子（1998）：教育場面から看護倫理を考える－学生に伝えたいこと－,Quality Nursing,4(1),22
- 佐藤友美（2005）：看護学生が捉えた倫理的問題-基礎看護学実習の体験の中で,日本看護科学会誌,25(3),92-95
- 小西恵美子,和泉成子（2006）：患者からみた「よい看護師」：その探求と意義,生命倫理,16(1),46-51
- 辰野千寿他（1995）：心理学　第2版,日本文化科学社.
- アン・デービス他（1999）:看護とは何か－看護の原点と看護倫理‐,照林社.

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計0件）

〔学会発表〕（計1件）
①田中真木：臨地実習で遭遇した問題への対処行動からみた看護学生が持つ価値観とは、第34回日本看護科学学会学術集会、2014年11月29日、名古屋国際会議場（愛知）
〔図書〕（計　　件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
田中　真木（Tanaka　Maki）
長野県看護大学・看護学部・助教
研究者番号：00405127

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：